

病害虫リスクアナリシスの結果(一覧)

No.	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主/宿主植物	生態、症状等(媒介性又は被媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む)	防除	結論	引用文献
1	節足動物	<i>Tuberolachnus macrotuberculatus</i>	ビワコブオオアブラムシ	カメムシ目 (Hemiptera)	アブラムシ科 (Aphididae)	中華人民共和国、日本(千葉県、東京都、兵庫県、愛媛県)	シャリンバイ、ビワ、バラ科	体長は5.1~5.3mm。無翅成虫は、頭部は黒褐色で胸部及び腹部は黄褐色。腹部背面には円錐形の小突起を有する。本種を含む同属の3種(本種、 <i>T. salignus</i> 、 <i>T. sclerata</i>)は、全て腹部に小突起を持つ。枝に寄生する。2005年に中華人民共和国で無翅成虫が初めて記録された。2013年に日本国内で有翅成虫が記録されている。国内では春と秋にシャリンバイやビワで発生することがわかっているが、夏にはこれらの植物から姿を消す。農業被害に関する情報はない。日本国内外で異なる系統・変異等が存在する報告や日本未発生病害虫のベクターとなる報告はない。	・薬剤散布(一部の寄主植物にはアブラムシ類で登録農薬がある。)	本種は日本に分布し、公的防除も行われておらず、国内外で異なる系統・変異等が存在する報告や日本未発生病害虫のベクターとなる報告もない。このため、本種は検疫有害動植物に該当しない。	1) Aphids on worlds plants (2020) <i>Tuberolachnus (Tuberolachniella) macrotuberculatus</i> . (online), (Accessed_2020-05-12). 2) 環境省 (2013) 侵略的外来種リストに関する各学会への意見聴取結果一覧. (online), (Accessed_2020-05-12) 3) 佐野正和・吉富博之 (2013) 日本昆虫学会第73回大会講演要旨. 2013年9月. 北海道大学. 4) Sopow, S. L. et al. (2017) Agricultural and Forest Entomology. 5) Yang, J. et al. (2005) Annales Zoologici, 55(3): 429-432. (abstract). 6) 吉富博之・佐野正和 (2012) 日本昆虫分類学会 第15回大会講演要旨. 2012年11月. 愛媛大学.
2	節足動物	<i>Eupteryx decemnotata</i>	—	カメムシ目 (Hemiptera)	ヨコバイ科 (Cicadellidae)	日本(千葉県、東京都、神奈川県、大分県)、イタリア、英国、オーストリア、ギリシャ、スイス、スロベニア、ドイツ、フランス、ポーランド、ポルトガル、チュニジア、アメリカ合衆国	オリガヌム属の一種 (<i>Origanum majorana</i>)、カラミンタ属の一種 (<i>Calamintha nepeta</i>)、キダチハヤクリコウ、ハナハッカ、メボウキ、メリッサ、ヤクヨウサルビア、ローズマリー、ハッカ属 (<i>Mentha piperita</i> 、 <i>Mentha</i> sp.)、メボウキ属の一種 (<i>Ocimum basilicum</i>)、イヌハッカ属、イブキヤクコウソウ属	成虫の体長は2~3mm。体色及び翅は黄色及び黄褐色で暗褐色又は黒色の斑紋をもつ。雌成虫は3週間以上、1日に2~4個の卵を産卵できる。20℃条件下では、卵から幼虫期間は約40日間であり、卵は20日から26日でふ化する。欧州の中央では、成虫は6月初~10月下旬(少なくとも2世代)まで観察されるが、2世代目が7月中旬でも確認されたことから、3世代も可能性がある。また、欧州の南部(スイス南部、オーストリアを含む。)では、1世代目の成虫が4月中旬から確認された。英国では、5月から10月まで成虫が見られる。卵で越冬し、屋内のローズマリー及びセージの鉢植え上では、冬でも確認されている。本種は葉を吸汁し、被害を受けた葉は壊死斑を生じ、やがて枯れ、落葉する。ポーランドでは、2015年初頭に温室栽培のローズマリーで減収を引き起こした。生産者は本種による被害が20パーセント以上になると見積もっており、甚大な経済的損失となった。欧州の南部でも、ローズマリーで深刻な被害が報告されている。ギリシャ南部では、単一植物の庭園が壊滅した。スイス南部の温室では、1990年代終わりから深刻な収量低下が起こっている。日本国内外で異なる系統・変異等が存在する報告や日本未発生病害虫のベクターとなる報告はない。	・薬剤散布(登録農薬はなし。その他の作物ではヨコバイ類の登録農薬がある。) ・ほ場の管理(剪定、異なる品種や非寄主植物の間作) ・天敵の利用	本種は、日本(千葉県、東京都、神奈川県、大分県)での発生が確認されている。公的防除は行われておらず、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はなく、日本未発生病害虫のベクターとなる報告もない。このため、本種は検疫有害動植物に該当しない。	1) Bantock, T. and J. Botting (2014) <i>Eupteryx decemnotata</i> . British bugs.(online), (Updated_2020-06-16). 2) Chaieb, I., et al. (2013) Acta Horticulturae. 997, 215-218. 3) Halbert S. E. et al. (2009) Pest Alerts - Ligurian Leafhopper, <i>Eupteryx Decemnotata</i> Rey.(online), (Updated_2009-03-26). 4) Iowa State University (2013) <i>Eupteryx decemnotata</i> . Bug Guide. (online), (Updated_2015-07-23). 5) 神奈川県 (2017) 病害虫発生予察特殊報第5号. 6) Los Angeles County Department of Agricultural Commissioner (2009) Ligurian Leafhopper (<i>Eupteryx decemnotata</i>) 7) Lubiarz, M. and K. Musik (2015) Journal of Plant Protection Research. 55(3): 324-326. 8) Mazzoni, V. Conti, B. (2006) Acta Horticulturae, 723: 453-458. 9) 千葉県 (2016) 病害虫発生予察特殊報第2号. 10) Nickel, H. and W. E. Holzinger (2006) Russian Entomological Journal, 15: 57-63. 11) 大分県 (2018) 病害虫発生予察特殊報第2号. 12) Rung, A. et al. (2009) A Journal of World Insect Systematics, Insecta Mundi 0088: 1-4.
3	節足動物	<i>Mecinus pascuorum</i>	ヘラオオバココバンゾウムシ	コウチュウ目 (Coreoptera)	ゾウムシ科 (Curculionidae)	汎世界的に発生(日本を含む。)	ヘラオオバコ	単食性。体長1.3~1.8mm(頭部および吻を除く)。幼虫がヘラオオバコの果実を食害し、蛹が穂状花序内に寄生する。主に欧州に広く分布している。その他、中央アジア、中東、アフリカ、北米、オーストラリアでも発生の報告がある。ヘラオオバコのみを寄主植物とするゾウムシで、被害に関する情報はない。日本では、2016年に青森県での発生が報告されている。日本国内外で異なる系統・変異等が存在する報告や日本未発生病害虫のベクターとなる報告はない。	・薬剤散布(登録農薬はなし。本種の寄主植物以外の作物にはゾウムシ類で登録農薬がある。)	本種は日本に分布する。公的防除は行われておらず、日本未発生病害虫のベクターとなる報告もない。このため、本種は検疫有害動植物に該当しない。	1) Caldara, R. and V. Fogato (2013) Zootaxa, 3654: 1~105. 2) 源河正明・吉武啓 (2018) 植物防疫所調査研究報告, (54).1-47. 3) Yoshitake, H. et al. (2016) Elytra, Tokyo, New Series, 6(2):199-200.
4	節足動物	<i>Parthenolecanium persicae</i>	チャノカタカイガラムシ	カメムシ目 (Hemiptera)	カタカイガラムシ科 (Coccidae)	インド、スリランカ、大韓民国、台湾、中華人民共和国、日本(岩手県、東京都、静岡県、大阪府、愛媛県)、パキスタン、アフガニスタン、イスラエル、イラン、トルコ、アイルランド、アゼルバイジャン、アルメニア、イタリア、ウクライナ、ウズベキスタン、英国、オーストリア、オランダ、カザフスタン、ガーンジー島、北マケドニア共和国、キプロス、旧ユーゴスラビア、ギリシャ、クアチア、ジョージア、スイス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、セルビア、タジキスタン、チェコ、デンマーク、ドイツ、トルクメニスタン、ノルウェー、ハンガリー、フランス、ブルガリア、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、マルタ、モルドバ、ルーマニア、ロシア、アルジェリア、エジプト、ジンバブエ、チュニジア、モーリシャス、モロッコ、アメリカ合衆国、カナダ、アルゼンチン、ウルグアイ、チリ、ブラジル、ベネズエラ、メキシコ、オーストラリア、ニュージーランド、ミクロネシア連邦	アーモンド、アボカド、アメリカブドウ、イチジク、エニシダ属の一種 (<i>Cytisus hirsutus</i>)、カキ、ガマズミ属の一種 (<i>Viburnum tinus</i>)、クレマチス属の一種 (<i>Clematis vitalba</i>)、クロミグワ、コウモリカズラ属の一種 (<i>Menispermum canadense</i>)、サンゴジュ、シマオオタニワタリ、セイヨウスモモ、セイヨウトネリコ、セイヨウバクチャイ、セイヨウヒイラギナンテン、ダイダイ、チャ、トウゴウ、トウゴマ、トキワサンザシ、ナワシログミ、ニレ属の一種 (<i>Ulmus thomasii</i>)、ネムノキ、パンシロウ、ヒッポファエ属の一種 (<i>Hippophae rhamnoides</i>)、ビワ、フジ属の一種 (<i>Wisteria sinensis</i>)、マサキ、マメガキ、マルメロ、マンゴウ、メギ、モモ、ヤツテ、ヨーロッパブドウ、レモン、ムレスズメ属、ギョリュウ属、クララ属、ジンチョウゲ属、ノブドウ属、バラ属、リンゴ属、レンギョウ属	雌成虫は体長7~9mm。オーストラリアでは、本種の雄成虫が確認されたとの記録があるが極めてまれであり、通常雄は見られず単為生殖を行う。年1回の発生であるが、クアチアでは2世代確認されており、夏期が長引けば2世代になりうる。第3齢幼虫又は成虫で越冬し、5月上中旬に成熟して体下に400~2600個を産卵する。ふ化期間は約20日であり、卵は6月上中旬にふ化する。ふ化幼虫は葉裏、果梗や果実に、雌成虫は枝や幹に寄生して、吸汁加害する。主な症状は、寄生した枝の枯死であり、ほとんどの寄主植物に早期の老化と落葉を引き起こす。植物によっては花がまばらになり、果実は小さいままになり、また、大量の甘露を生成し、木がすすかびで覆われる。国内での発生は一般的でないが、静岡県の茶園に局部的に多発した記録がある。ブドウの被害は吸汁による直接的なものより、すす病の誘発によるものが顕著で、特に果穂に寄生した場合には商品価値が著しく低下する。デラウェア等の粗皮の多い品種や老木に発生しやすい。しかし一般に個体数は少なく、ほとんど害害はない。国外では欧州、西アジア、南米の一部において、ブドウや落葉性果樹の害虫として重要視されており、オーストラリア、エジプト及びニュージーランドでは集団発生の記録がある。一方、フランス、ハンガリー、イタリア、ポルトガル、スペイン、スイス及びニューカサス地方のブドウ畑では、経済的に重大な発生が起きることは減少しなくなり、アメリカ合衆国カリフォルニア州におけるブドウ畑では、経済的重要性は低い。本種は日本既発生のブドウ属のleafroll病の病原体であるブドウ葉巻随伴ウイルス(<i>Grapevine leafroll-associated virus 3</i>)を媒介するとの報告がある。	・薬剤散布(一部の寄主植物では、カイガラムシ類で登録農薬がある。) ・ほ場の管理(剪定、異なる品種や非寄主植物の間作) ・天敵の利用	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はなく、公的防除も行われておらず、日本既発生の病原体であるブドウ葉巻随伴ウイルス(<i>Grapevine leafroll-associated virus-3</i>)を媒介するとの情報があるが、日本未発生病害虫のベクターとなる報告はない。このため、本種は検疫有害動植物に該当しない。	1) Afonso, A.P.S. et al. (2004) Ciência Rural. 34(4): 985-989. 2) Ben-Dov, Y. and C.J. Hodgson. (1997) World Crop Pests. Soft Scale Insects Vol. 7B: Their Biology, Natural Enemies & Control: 323-331. 3) CABI (2019) Crop Protection Compendium. (online), (Last modified_2019-11-24). 4) EPP0 (2004). Bulletin OEPP/EPP0 Bulletin. 34: 427-438. 5) Hommay, G. et al. (2009) 16th meeting of the international council for the study of virus and virus-like diseases of the grapevine: 286-287. 6) Kawai, S. (1972) Bulletin of the Tokyo-To Agricultural Experiment Station. 6: 1-54. 7) 河合省三 (1980) 日本原色カイガラムシ図鑑. 8) Masten-Milek, T. et al. (2007) Lectures and papers presented at the 8th: 326-329. 9) Meng, B. et al. (2017) Grapevine Viruses Molecular Biology, Diagnostics and Management. Springer International Publishing 698pp 10) Rakimov, A. et al. (2013). Australian Journal of Entomology. 52(4): 371-378. 11) Shinji, O. (1935) Dobutsugako Zasshi, Tokyo (Journal of the Zoological Society of Japan). 47: 767-777. 12) Simbiken, N. A. (2015) Biology and ecology of grapevine scale parthenolecanium persicae (fabricius) and frosted scale parthenolecanium pruinosum (Cocquillet)(Hemiptera: Coccidae) on Grapevines Vitis Vinifera L. (online), (Accessed 2020-06-12) 13) 梅谷献二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大辞典.
5	糸状菌	<i>Pythium brassicum</i>	ストック苗腐病、ナタネ・ナバナ苗根腐病	Pythiales	Pythiaceae	中華人民共和国、日本(千葉県、三重県)、アメリカ合衆国	キャベツ、ストック (<i>Matthiola incana</i>) 他、アブラナ科植物	症状は、苗の地際部及び根部に水浸状の病斑を形成し、乾燥すると白色~茶色に腐敗してくびれ、苗全体が萎れて立ち枯れる。罹病胚軸には卵胞子が観察されることもある。本菌の病原性は弱く、生育が進んだ苗での発病の可能性が低く、育苗初期で問題となる菌とされる。また、中華人民共和国では、ハクサイの主根下部が腐敗するとともに根の維管束が褐色~黒色に変化し、成長が鈍化するあるいは壊化し、枯死に至るとの報告もある。一般的にPythium属菌は、卵胞子を形成し、被害残さとともに土壌中で越冬し、土壌伝染する。条件が整うと発芽して菌糸又は遊走子を形成し、植物体に感染する。感染後は菌糸が組織中にまん延し、菌糸上に遊走子のうが形成され、遊走子のうから生じた球のうから放出された遊走子が二次伝染源となる。	非アブラナ科野菜の輪作を行うとともに、アブラナ科雑草の管理を行う。	本菌は日本に分布し、宿主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない。公的防除も行われていない。以上のことから、検疫有害動植物に該当しない。	1) 江原淑夫・生越明・土崎常男・道家紀志・古澤巖・脇本哲 (1994) 概説植物病理学. 2) Guo Mei et al. (2019) Mycosystema 38(6): 761-767. 3) 窪田昌春・我孫子和雄 (1998) 日本植物病理学会報 64: 323-327. 4) Micobank <i>Pythium brassicum</i> . (online), (Accessed_2020-06-16). 5) Stanghellini, M. E. et al. (2014) Plant Disease. 98: 1619-1625. 6) 植松清次・田中千華・海老原克介・鐘ヶ江良彦・景山幸二 (2015) 日本植物病理学会報 81:50-51. 7) USDA Fungal Databases <i>Pythium brassicum</i> . (online), (Accessed_2020-06-16).

No.	分類	学名	和名	目名	科名	発地域	寄主/宿主植物	生態、症状等(媒介性又は被媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む)	防除	結論	引用文献
6	糸状菌	<i>Alternaria crassa</i>	チョウセンアサガオ類輪紋病	Pleosporales	Pleosporaceae	汎世界的に発生(日本を含む)	イヌホオズキ、オオセンナリ、オランダゼリ、カスミソウ属の一種(<i>Gypsophila trichotoma</i>)、コエンドロ、スイカ、セイヨウハシドコロ、トマト、ナス、ハレイショ、ヒヨス、キダチチョウセンアサガオ属、トウガラシ属、チョウセンアサガオ属、ペチュニア属	症状は、はじめ葉に小褐変を生じ、徐々に輪紋状に拡大、のちに病斑部は乾燥し、しばしば破れる。症状の進行により、葉色が黄色を帯び、早期落葉を起こす。花弁には淡褐色の輪紋斑が生じ、のち花器全体に拡大、褐変腐敗し、乾燥枯死して落花する。果実にも同様の輪紋斑を生じ、症状の拡大とともに果面全体が褐変する。分生子は葉の表裏両面、花弁および果実の輪紋斑上にすず状に形成される。分生子あるいは菌糸の形で罹病植物の残さや種子で越冬する。種子伝染により保菌した種子、あるいは表面を汚染された種子により幼苗に感染し、茎を損傷させ地際部の腐敗をもたらす、立枯れ症状を引き起こす。感染後形成された分生子は風によって飛散し、まん延する。	情報なし。	本菌は日本に分布し、宿主植物の被害に差がある系統が存在するとの報告はなく、公的防除も行われていない。以上のことから、検疫有害植物に該当しない。	1) California Department of Food & Agriculture (2019) California Pest Rating Proposal for <i>Alternaria crassa</i> (Sacc.) Rands 1917. (online), (Accessed_2020-06-11). 2) 市之瀬玲美・西川盾士・森田琴子・柴田葵・吉澤祐太郎・荒金真佐子・廣岡裕吏・鍵和田聡・石川成寿・堀江博道 (2015) 関東東山病害虫研究会報 62: 83-86. 3) Micobank <i>Alternaria crassa</i> . (online), (Accessed_2020-05-25). 4) USDA Fungal Databases. (online), (Accessed_2020-06-11).
7	細菌	<i>Pantoea ananatis</i>	イネ内穎褐変病 タマネギりん片腐敗病 パイナップル花穂病 メロン果実内腐敗病 アリウム類腐敗病 スパシフィルム葉腐細菌病 フリージア首腐病 レッドトップ褐変病	Enterobacteriales	Enterobacteriaceae	インド、カンボジア、タイ、大韓民国、台湾、中華人民共和国、日本、フィリピン、マレーシア、イタリア、スペイン、ポーランド、ロシア、ジンバブエ、トーゴ、ナイジェリア、ベナン、南アフリカ共和国、モロッコ、アメリカ合衆国、カナダ、アルゼンチン、ガイアナ、グアテマラ、ハイチ、ブルトリコ、ブラジル、ベネズエラ、メキシコ、オーストラリア	イネ、スーダングラス、トウモロコシ、トマト、パイナップル、メロン、モロコシ、スパシフィルム属、ヌカボ属、ネギ属、フリージア属、ユーカリノキ属、その他が、一般的に植物の腐生細菌あるいは植物の常在細菌として知られており、宿主植物に対して明確な病原性を示さないことからマイナーな病原細菌として扱われている。国内で病害が報告されていない宿主植物において、海外で病害が報告されている事例及び国内で病害が報告されている宿主植物であっても、海外では異なる症状が生じる事例が報告されているが、これらが系統として確立されているとの報告はない。本菌には2つの病原型(<i>P. ananatis</i> pv. <i>ananatis</i> (syn. <i>Erwinia ananatis</i>)及び <i>P. ananatis</i> pv. <i>uredovora</i> (syn. <i>Erwinia uredovora</i>))があるとの情報があるが、いずれの病原型も日本既発生である。また、本菌はネギ及びタバコへの病原性並びにインドール酢酸及びサイトカイニン合成遺伝子の有無により、3つのグループ(I、II及びIII)に分けられ、それぞれ宿主植物や病原性に違いが見られることが報告されているが、いずれのグループも日本既発生である。本菌は、国内既発生の <i>Frankliniella fusca</i> (ウスグロアザミウマ)及び <i>Thrips tabaci</i> (ネギアザミウマ)並びに国内未発生の <i>Pseudatosmoscelis seriatus</i> (ワタノミハムシ)により媒介される可能性があることが報告されている。	薬剤散布(一部の寄主植物には、イネ内穎褐変病及びタマネギりん片腐敗病で登録農薬がある。)・本菌は多くの雑草種の葉面上に存在することが知られているため、苗床及びほ場では雑草管理の実施が重要である。	本菌は日本に分布し、日本と世界に分布する系統(病原型)間において宿主植物の経済的被害に明確な差が生じるとの報告はなく、公的防除も行われていない。以上のことから、検疫有害動植物に該当しない。	1) Azad, H. R. et al. (2000) Plant Disease, 84(9), 973-979. 2) 畔上耕児 (2016) 微生物遺伝資源探索収集調査報告書, 25:45-56. 3) Bruton, B. D. et al. (1991) Plant Disease, 75(2), 180-183. 4) CABI (2020) Crop Protection Compendium. (online), (Accessed_2020-06-16) 5) Coutinho, T. A., and S. N. Venter (2009) Molecular Plant Pathology, 10(3), 325-335. 6) Coutinho, T. A. et al. (2002) Plant Disease, 86(1), 20-25. 7) Gitaitis, R. D. and J. D. Gay (1997) Plant disease, 81(9), 1096-1096. 8) Gitaitis, R. D. et al. (2003) Plant Disease, 87(6), 675-678. 9) Goszczynska, T. et al. (2007) Plant Disease, 91(6), 711-718. 10) Hasegawa, M. et al. (2003) Journal of general plant pathology, 69(4), 267-270. 11) 東経行・飯山和弘・伊藤孝弥・奥野健太郎・土屋健一・古屋成人 (2017) 日本植物病理学会報, 84 (1): 64-64. 12) Kido, K. et al. (2010) Journal of general plant pathology, 76(3), 208-218. 13) 岸國平(編) (1998) 日本植物病害大事典. 14) NARO (2020) 日本植物病名データベース. (online), (Accessed_2020-06-16). 15) Serrano, F. B. (1928) Philippine Journal of Science, 36(3). 16) Stall, R. E. et al. (1969). Fla State Hort Soc Proc. 17) Watanabe, K. et al. (1996) Applied Entomology and Zoology, 31(3), 459-462. 18) Young J. M. et al. (2004) Names of plant pathogenic bacteria published since 1995. (online), (Accessed_2020-06-16) .	